

57 リンゴ褐斑病の子のう胞子飛散消長

福島県果樹試験場 病理昆虫部・平成12年度試験研究成績書

1 部門名 果樹－リンゴ－病害虫発生 分類コード:04-01-22000000

2 担当者 菅野英二・佐々木正剛

3 要 旨

(1)平成11年に当場内の‘ふじ’/M.26(20年生)に自然発生したリンゴ褐斑病の罹病葉を落葉時に採取し、4月18日から5月30日までの間、罹病葉上の子のう盤の中の子のう胞子の成熟状況を光学顕微鏡により調査した。また、採取した罹病葉を網袋に入れ、その上に吸引式胞子採集器を設置し、子のう胞子を捕捉してその飛散時期について調査した(敷詰区)。さらに平成11年に褐斑病が多発したほ場でも自然状態のまま吸引式胞子採集器を設置し、胞子飛散を調査した(自然区)。

(2)子のう胞子の成熟経過を調査した結果、4月18日にはすでに子のう殻の成熟がすすみ、半分以上の子のうで子のう胞子の形成が認められた。4月20日の調査以降も、成熟子のうの比率は10～60%で変動した。5月30日には、子のう胞子が飛散したと思われる変形した子のうのみが認められ、この時期には子のう胞子の飛散は終息したと考えられた。

(3)子のう胞子の飛散は、敷詰区で4月20日から認められ、その後、ほぼ連続的に飛散が確認され、5月24日まで続いた。一方、自然区は調査を開始した4月28日から飛散が認められたが、子のう胞子の捕捉は断続的であった。また、両区とも飛散のピークはかならずしも明瞭ではなかったが、降雨の多い日に飛散数が多い傾向にあった。

(4)以上の結果から、平成12年の褐斑病の子のう胞子は、4月中旬から飛散を開始し、その終期は5月中旬～下旬と推定された。したがって、褐斑病の防除時期は従来予想していた時期よりかなり早く、開花期から防除が必要であることが判明した。